

島尾敏雄非小説集成5

島尾敏
非小説集成
5 文学篇
2

冬樹社



鳥尾敬雄非小説集成（全六卷）

第五卷 文学篇Ⅱ

昭和四十八年七月三十一日初版第一刷発行
昭和五十二年九月 五 日初版第二刷発行

著 者 鳥尾敏雄

発行者 高橋直良

発行所 冬樹社

東京都千代田区神田神保町二の十八 一〇一

電話〇三（二六四）〇三四六 振替東京八〇七七五七

印刷所 本文・稲葉印刷株式会社

平版・創 美

製本所 一重製本株式会社

装幀者 秋山法子

©Toshio Shimao 1973 0395-00405-5190

第五卷
目次

文学篇Ⅱ

「広島郵政」六十八号小説選評	二
生者の怯えの中で	三
小島信夫著「島」	一六
「広島郵政」七十号小説選評	一八
妻への祈り	二
窪田精著「ある党員の告白」	三六
「夢の中での日常」あとがき	四一
秋の季節	四二
埴谷雄高と「死霊」	四四
「広島郵政」七十二号小説選評	四六
椎名麟三著「愛と自由の肖像」及び「猫背の散歩」	五〇
重松教授の不肖の弟子たち	五三
「島の果て」あとがき	五六
帰省学生の演劇	五七
第一回読書会に参加して	五九
一つの反応	六〇
夫から	六二
非超現実主義的な超現実主義の覚え書	六三

宮崎の印象…………… 六

さよなら真夏の輝きよ！…………… 七

妻への祈り・補遺…………… 六

われわれの中のクリスマス…………… 七

今年の仕事…………… 八

伊東さんのこと…………… 八

小説の素材…………… 八

長崎のロシヤ人…………… 七

吉行淳之介の短篇…………… 九

消夏法…………… 九

大江健三郎著「われらの時代」…………… 九

東洋史の入口で…………… 九

カゴシマの文学的な環境…………… 一〇

荒れた日に遊ぶ子ら…………… 一〇

「離島の幸福・離島の不幸」あとがき…………… 一一

丹羽正光氏への返事…………… 一二

宮本常一著「日本の離島」…………… 一〇

不確かな記憶の中で…………… 一二

家庭小説選評（昭和三十六年度）…………… 一七

フェリーニのおののき	二九
芸術選奨を受けて	一三一
たより	一三四
安岡伸好著「遠い海」	一三五
文壇遠望記	一三六
石川さんの方	一四三
受賞のあとの今	一四七
ある日私は	一四九
私の八月十五日	一五〇
象徴的な桜島が存在	一五三
七年目の東京	一五六
家庭小説選評（昭和三十七年度）	一五九
鬱憤譚	一六〇
日記	一六一
沈復の「浮生六記」	一六七
わが小説	一七〇
私の周辺	一七二
読みちがえ又はきまじめな注釈	一七三
奄美の昔ばなし	一七五

蛇性の姉	一七六
猫女房	一七六
妹と妻	一七九
夫と妻	一八一
舌切り娘	一八三
三人の娘	一八四
継母継娘	一八六
二人のわかもの	一八七
三人兄弟	一八九
奄美のユリワカ	一九〇
鬼と四人の子ら	一九三
「島へ」後記	二〇〇
母の舌	二〇一
「非超現実主義的な超現実主義の覚え書」後書	二〇三
アンケート・批評家に望むへのこたえ	二〇四
次の白い頁に	二〇四
大牟羅良編「北上山系に生存す」	二〇七
過ぎ行きの素顔	二〇九
死をおそれて	二一一

幼い頃……………	二八
南日本新聞・新春短篇小説選評(昭和三十八年度)……	三九
アンケート・新「北九州市」に望むへのこたえ…………	三三
キャラメル事件……………	三二
私の受験時代……………	三四
長篇の愉しみ……………	三六
南日本新聞・新春短篇小説選評(昭和三十九年度)……	三九
二つの根っここのあいだで……………	三〇
長谷川四郎著「目下旧聞篇」……………	三三
「出発は遂に訪れず」後記……………	三四
図書館の秘儀……………	三五
熊本の縁……………	三八
母を語る……………	二四二
アンケート・作家から見た読者へのこたえ……………	二四三
アンケート・著作家への手紙のこたえ……………	二四三
私の中の神戸……………	二四四
私の文学遍歴……………	二四六
アンケート・感銘を受けた本へのこたえ……………	二六六
猫と妻……………	二六六

消された先祖……………二五〇

解題……………二五二

文学篇Ⅱ

「広島郵政」六十八号小説選評

「加納さん」(空知浩)

加納さんという夫婦共稼ぎの公務員の生活が描かれていて、それは少しおどけた口調でいわば淡々と筆が運ばれる。而も作者の眼は見るべきものをよく見ている。加納夫婦の家事の共同負担が、実は「思想とか愛情とか、もっともらしい考えから始ったものではない」ように、加納さんの勤めている役所の中での不都合にも、もっともらしい考えはしないで多分自分のくじ運が悪いからだろうと考えるふうに描かれる。しかし主人公のそのくじ運が悪いという現実に、とにかく作者は眼を向けて見ている。つまり一つの関係をじっと観察している姿勢がこの作品を支えている。

しかし更にこの加納さんの夫婦関係を「自分たちの結婚がとり返しのつかない失敗だった」或いは「恋愛は空想している方が楽しい」などと書くことによって問題をそらしてしまわずに、むしろ積極的に「端で見る眼に羨ましい」夫婦生活のあり方をみつめ、それを一つの世界として描きだすべきだと思った。

「隣近所の奥さん達からすると、美佐子夫人はこの世で最も愛情深い夫を得た幸運な女性なのだろう」だが、実は見合結婚の平凡な夫婦に過ぎないというおちで片附けられているように見えることは、この作品を低めている。それと関連してこの作品を覆っている幾分おどけたユーモラスな風な

書き方を私は疑問に思う。

「根のある雑草」(青石松千代)

或る保険外交員を描こうとしているが、その人物に対する作者の眼の位置が低いのではないかと思わせるところが作品を浅くしているように思う。それは形容詞を、手垢のついた卑俗なことに手輕にたよりすぎていることに現われている。(たとえば、「百姓と洗濯ものは搾れば搾るほど具合がよくなるという式の」「でんと深く」「蛇の道はへび」「幹候として油を絞られ」など)これはもっと自分で、ただたどしくても新鮮なことをばを注意してえらぶべきだ。次に主人公の性格を講談本の主人公のようにしてしまっていることは(例「精悍、空手界では有名な青年が生れて始めてながす痛恨の涙」など)効果的でもない。

保険外交の仕事がなぜ厭がられるかに焦点をしぼった方が作品の質を重くしたのではなかったか。そういうふうに書かなければ読者をうなずかせることは困難だろう。

ただ筆の運びに粗いながら強引な所があり、それは一つの物語を仕組むのに有力である。その長所がどれだけ生かされるかは、長篇になるものとしてこの作品が完結されたものについて見なければなるまい。この第一部だけでは意味をなさず評価もできない。主人公が「社会の裸身に直接ふれることができる」ことに保険外交の仕事にただ一つの喜びを感じている個所があるが、むしろその所をはぶかずに描写した方がよいのではないか。

生者の怯えの中で

すでにその対象とするところの人自身によっては読まれることの恐らくは無い此のような文章をいま又服部達について書かねばならぬということは、私を日暮れどきの街の果ての迷いやすき境域に何ものかが捨て去る。しかしこれはひとつの形式でありその形の中でのみ私はいくらかは私の思いをひとに語りかけることもできる。

或る日服部達は私の手帳の中から削りとられた。それより前私は彼の眼が私の肺腑をつらぬき、つきぬいた所で再び私の背後をじっと見つめている気配を感じ出していた。私は彼の視線の尖端をかつちり胸廓の暗箱につかまえこむことには失敗しつつけた。私ははじめ彼のうしろすがたを愛した。彼の背後の肩幅は私のその倍ほどもあって、そしてその肩幅の広さだけ、彼の青白く高い額の広さと、眼のいくらかは誇り高げに拒否的なやさしさが、効果的であった。彼はその背後の姿を私の眼の中に残してどこかに行ってしまう。それは背後を見る者にとってはかすかな不安であり、畏敬であるようなものともなる。私は端緒に於いて彼を避けることがよいと思った。私はただ彼の背後の姿を見ているだけにした。彼のうしろすがたは私を勤勉に誘い又遠い過去への忘却の中から何かを思い出させようとするはたらきを持った。彼は批評的活動を開始した。恐らくは彼は私にその背後の姿をも見せなくなるであろう。私はやせた荒蕪地に過ぎない。或る日彼は突然（と私には思えた）

私の方を振向き、眼鏡の下の眼を柔和に、しかし焦点は私を貫き通した背後に置いたあのやり方で私に話しかけてきた。その言葉は私の口の中で甘くとけた。私は甘さを確実に味わい、しかし又疑った。私の眼に彼の背姿が焼付いてとれてはいないから。やがて又私は彼の背中を見るだろう。私にはそれはいかにも頼もし氣に写るが私の視線は拒絶されている。私はおせっかいに彼の胸の薄さを氣遣った。私は私の中のスノブな悪臭を罰として嗅ぐことに終った。彼はくるりと背後を見せて、私を仲間にはいれてくれないどこかの場所に立去って行った。私は彼を取り逃がしてしまった空虚の中で、佇まなければならぬ。「ほんのわずかなタイミングのずれが」彼の「勘にさわった」ことだろうと察するが、私にも手離せぬ異常な(?) 日常があった。或る夜「構想」の仲間からひとり先にはぐれて帰る街筋のかどで、私の名前を高らかに呼びとめたその彼の声が今私の耳の底に残っている。思わず力を得てほこらし氣に立ち止り振り向いた私に、彼が手をあげ紙袋に包んだ書物をかかえて真っすぐやって来る。しかしそのときは私はいつもの彼に代ってくりと背中を見せて帰らなければならなかったのだ。帰宅すると小さな子供が二人だけ家の中に取り残され妻の姿が見えなかった。いつものように鉄路の鉄橋工事のあたりをさがしても見つからぬ。深夜やがて工事人夫に放神した妻が送り届けられるような日々がその頃の私を包み、その状態はいよいよ傾いて来ていた。私の生活は短時日の間にいくつもの節をつくった。たとえば妻を神経科の病院に入院させる。すると先ず彼が私の前に現われ書評の仕事を伝えてくれた。妻を退院させ佐倉に家を移す。すると先ず彼が電報をよこし私に適当な職のあることを教えてくれた。私は妻と共に精神科の病院に入院する。すると先ず彼が電話をかけてよこし私も妻と共に倒れないようにと鼓舞された。そして、私は東京を離れ、南の果ての島のひとつに渡って来た。しかしもう彼のどんな訪れもやっては来ない。